

『詩経』形成史における安徽大学蔵戦国竹簡の意義

湯浅 邦弘

序言

二〇一九年八月、『安徽大学蔵戦国竹簡（一）』（安徽大学漢字發展与応用研究中心編、黄徳寛・徐在国主編、中西書局）が刊行された。これは、二〇一五年に安徽大学が入手した戦国時代の竹簡の全容を分冊方式により公開していくもので、予告されていた通り、この第一分冊では、竹簡本『詩経』が収録された。

『詩経』は、古代歌謡の実態を知りうる貴重な古典であるが、もともと三千篇あった詩を孔子が三百篇に編集したとの伝承とともに、中国儒教の重要経典「五経」の一つとなった。その際に採用された毛亨・毛萇による『毛詩』テキストが確固たる地位を占めるに至る。しかしそのことは逆に、本来の『詩』の実態を分かりにくくすることにもなった。春秋戦国時代の『詩』とはどのようなものであったのか。

本稿では、新出土文献研究の歴史を振り返りながら、安徽大学蔵戦国竹

簡の資料的意義と古代における『詩経』テキストの形成について基礎的な考察を加えてみたい。以下、この竹簡を「安大簡」と略称する。

一 安大簡の公開

安徽大学が戦国時代の竹簡を入手したとの報道を受け、筆者はかねてから研究交流のある武漢大学の陳偉教授に問い合わせたところ、安徽大学で竹簡整理と釈読にあたっている黄徳寛教授をご紹介いただき、日程調整の後、二〇一七年二月、安徽大学訪問が実現した。科学研究費基盤研究B「中国新出土文献の思想史的研究」による研究活動の一環であり、日本の研究者としては安大簡実見のための来訪は初めてのことであった。

まず、安徽大学逸夫図書館において、同大学の徐在国教授より概要説明を受けた。それによれば、安大簡は二〇一五年、安徽大学が入手したもので、木の板の上に大量の竹簡が重なっている状態で持ち込まれたという。もともと湿気防止のためか漆が塗られた竹簡の中に入っていたようだが、

その竹簡はすでに破損していた。竹簡の保存状態は良好であったが、癒着している竹簡を剥離し、表面の泥を除去するなどの整理作業に一年ほどの時間を要した。清掃後に全竹簡の写真を撮り、赤外線スキャンをして、編連と整理を行った。その際、竹簡を綴じている編繩がはっきり確認され、しかも、灰色と赤色の二種があった。竹簡の形制や字体は様々であったが、それらが異なる点は、かえって再編作業に役立った。竹簡の総数は一一六七枚。

内容はすべて古典籍で、中でも注目されるのは『詩経』。各竹簡の表の面の下端に「一」〜「百十七」までの通し番号が付されていて、現行本『毛詩』の国風部分とほぼ対応している。異文はかなりあるが、この点は、逆に難読字の理解にもつながる。また、各篇の章次（章の順序）も異なるものがある。竹簡の年代は、「戦国早中期」と推定される。

『詩経』以外にも、「一篇から成る『楚辞』、古代楚国の歴史書すなわち「楚史」関係の文献、「仲尼曰」で始まる儒家系文献、『上海博物館蔵戦国竹書』（上博楚簡）第四分冊所収『曹沫之陳』と同様の文献、および「相面」（人相を見る）に関する文献などがある。

こうした説明を受けた後、収蔵室で竹簡を実見した。この部屋は、温度・湿度管理ができる保存室として新たに作ったものであるという。靴をビニール袋で被ってから入室した。竹簡の入っているトレーは全部で六十個。実見したのは五つのトレーで、それぞれに竹簡十数枚が薬液に浸っており、全七十三枚。各トレーはラップで被われている。竹簡はガラス板で挟まれて、上下が紐で固定され、上部に番号を付けた識別タグがつけられている。

筆者が以前山東省博物館で実見した銀雀山漢墓竹簡は竹簡一本一本が試験管に入れられていたので、その点について質問すると、長い竹簡もあつて試験管には入れにくく、ガラス板で固定してトレーに入れて保存するの

が良いと判断したという。また、竹簡の背面には、編連の間違いを防ぐためと思われる劃痕と劃線があるとのことであった。竹簡背面の劃痕等については二〇〇九年の北京大学竹簡で初めて明確に認識されるようになったもので、竹簡を再排列する際、重要な手がかりとなる。文字については、筆者が古文字学の専門ではないので明確な判断はできないが、拝借したLEDライト（懐中電灯）も使って観察したところ、これまで公開されてきた新出土文献の内、戦国時代の楚文字で書かれたものと字体が似ていると感じられた。

その後、黄徳寛教授との会談で、さらに以下の説明を受けた。

安大簡は初めに『詩経』を公開し、その後、分冊方式で他の文献を刊行していく。全体的に内容が豊富で、特に『詩経』と「楚史」は非常に重要な資料である。「楚史」を公表すると、学界に衝撃を与えるかもしれない。今まで公開されている関係資料の中で最も詳細に記されている。『史記』には見えないものや、司馬遷が誤って記録したと思われる内容があるなど、今までの疑問が解決される可能性がある。また、新出土文献の清華簡（清華大学蔵戦国竹簡）に含まれていた「楚史」関係資料、具体的には『楚居』や『繫年』などの対照が可能である。清華簡『楚居』は主に遷都に関する内容であるが、安大簡「楚史」の内容は『楚居』よりもかなり詳しく、楚の祖先や王の系譜、遷都以外の情報も含まれている。

会談の中でさらに注目されたのは、安大簡の整理と公開準備過程で、竹簡の年代測定が北京大学と荊州文物保護中心との二箇所で行われたという点である。また、二〇一六年五月に中国国内の専門家を招いて安大簡の鑑定会・座談会が開催されている。その際、安徽大学の竹簡整理と保存の状況が高く評価され、安大簡は郭店楚墓竹簡（郭店楚簡）や上海博物館蔵戦国竹書（上博楚簡）よりもやや古い「戦国早中期」（前四世紀）頃の

竹簡と推定され、「国宝級」という評価を得たとのことである。こうした二重三重の測定・鑑定が行われたのは、これまでの新出土文献にはなかったことであるが、それはなぜであろうか。ここで、出土竹簡の歴史を簡潔に振り返って考えてみたい。

二 新出土文献研究の歴史と問題点

中国古代思想史研究に出土文献が衝撃を与えるようになったのは、一九七〇年代の竹簡・帛書の発見からである。一九七二年の銀雀山漢墓竹簡、一九七三年の馬王堆漢墓帛書、一九七五年の睡虎地秦墓竹簡がその代表と言えよう。しかし、銀雀山漢墓竹簡は主として兵書関係文献であり、馬王堆漢墓帛書は主に道家や医書などに関わる文献、睡虎地秦墓竹簡は秦の法律関係文書であり、中国思想史研究の主軸と考えられていた儒家系文献や経書に直接関わるものはほとんどなかった。また、これらは秦漢以降の文献で、春秋戦国期のものではなかったことから、「諸子百家」の時代の研究には大きな影響を与えないとも考えられた。そこで、当該分野の研究者が研究手法を大きく変更し、出土文献を積極的に活用するまでには至らなかったことである。依然として伝世文献を中心とする思想史研究が続けられていくこととなる。

ところが、一九九〇年代以降の新出土文献は、その様相を一変していく。一九九三年に発見された郭店楚簡、その翌年に上海博物館が入手した上博楚簡、二〇〇八年に清華大学が入手した清華簡などは、戦国時代の竹簡であることに加えて、儒家系の文献も多く含んでおり、古代思想史の分野において、もはやこれらの出土文献を無視した研究は成り立たないという状況に至ったのである。さらに、二〇〇八年の岳麓書院藏秦簡、二〇〇九年・

二〇一〇年の北京大学藏漢簡・秦簡なども続き、かつて敦煌文書の発見が「敦煌学」という学問領域を切り拓いたのと同じように、「竹簡学」の時代が到来したとの印象があった(注1)。

ただ、そこには、新たな問題も持ち上がった。それは、発掘簡と非発掘簡、真簡と偽簡という深刻な問題である。一九七〇年代の銀雀山漢墓竹簡や睡虎地秦墓竹簡、一九九三年の郭店楚簡などは、その地名が名称に付けられていることから明らかのように、出土地が明確になっている竹簡である。一九八〇年代に発見された張家山漢墓竹簡や二〇〇九年に公開された天水放馬灘秦簡も同様である。これに対して、上博楚簡、岳麓秦簡、清華簡、北京大学竹簡などは、博物館や大学など所蔵機関の名を冠している。

これは、出土地が判明していない、あるいは公表されていないからである。上博楚簡については、湖北省あたりで盗掘された後、香港の骨董市場に売り出されていたのを上海博物館が緊急購入したと伝えられている。

そこで、出土地が明確でない竹簡については、より慎重な取り扱いが求められるようになり、発掘簡と非発掘簡という区別がなされる場合もある(注2)。正式な考古学調査による発掘で発見された竹簡とそうでないものを厳密に区別しようというものである。大量の竹簡の相次ぐ公開によって慎重な研究が求められることを指摘するもので、重要な提言だと言えよう。

但し、これは発掘簡の方が資料的価値が高く、非発掘簡は資料的に劣るということを一概には意味しないであろう。そもそも竹簡は地中(墓中)に埋められていて、それが発掘されることによって現代によみがえるのであるから、考古学的な発掘であれ、金目当ての盗掘であれ、発掘されたことには変わりがない。

問題は、発見されてから所蔵機関に収まるまで丁重に取り扱われたか、およびその時代性や真偽が慎重に鑑定されたかどうかという点である

(注3)。もちろん一九九〇年代以降発見の竹簡については同位炭素測定が実施されていて、郭店楚簡、上博楚簡、清華簡については戦国時代の竹簡であることが確認されている。

しかし、ここで注意しなければならないのは、竹簡そのものは古い時代のものであったとしても、文字の書かれていない空白の竹簡が多数含まれていれば、そこに文字を書き付けて偽造することが可能となる点である。かつて、敦煌学が隆盛した際、多くの偽物が出回ったとされるが、竹簡についても同様の現象が生ずる可能性がある。近年でも、ある竹簡の発見が鳴り物入りで報道され、立派な図版が刊行されたにもかかわらず、偽簡の疑いが濃厚となり、研究対象から外れてしまったという深刻な事例があった。こうした真偽に関わる事案が発生すると、出土文献全体の信用も揺らいでしまう恐れがある。

このような状況を受けて、安大簡については、専門家に竹簡を公開して鑑定会が実施され、また二箇所での年代測定では、竹簡、竹筍残片、漆片について慎重に測定が行われた。竹簡については文字の書かれていないものと、書かれているものとの両方が測定され、それらすべての測定結果が公開された。二〇一七年第九期の『文物』(総第七三六期)に掲載された黄徳寛「安徽大学蔵戦国竹簡概述」がそれである(注4)。竹簡の化学分析は詳細を極め、その時代性・地域性を確認するために、安大簡と荊州夏家台楚簡、現代の竹材との比較も行われ、その化学的特性から、安大簡と荊州夏家台楚簡とは類似する一方、現代の竹材とは明らかに異質であるとの結果が得られた。これらの総合的な検討を踏まえて、この「概述」は安大簡を「戦国楚簡」と推定している。安徽大学がこの竹簡の資料的価値についていかに慎重に検討を加えたかが分かるであろう。

こうした段階を経て、ついに二〇一九年八月、『安徽大学蔵戦国竹簡(一)』

が刊行された。これを受けて、出土文献研究の拠点となっている武漢大学簡帛研究中心では、同研究中心が発行する学術誌『簡帛』の英語版に安大簡『詩経』の特集を組むこととなり、筆者にも投稿の依頼があった。そこで筆者は、安大簡『詩経』の一篇に着目した拙稿を投稿し、二〇二〇年三月に受理された(注5)。以下の小論は、その内容も一部含んでいることについて予めお断りしておきたい。

三 安大簡『詩経』の概要と「異章次」

刊行された『安徽大学蔵戦国竹簡(一)』によれば、安大簡『詩経』には、各竹簡の下端に「一」〜「百十七」の通し番号が記されているが、この内二十四簡分が欠失していたため、残存簡は計九十三簡。竹簡の簡長は四十八・五センチ、幅は〇・六センチ、毎簡二十七〜三十八字が記されている。三道編綫(注6)で、背面には劃痕がある。竹簡本の内容は、現行本『詩経』の国風部分に相当し、詩五十七篇が確認される。

その内訳は、「周南」十篇、「召南」十四篇、「秦」十篇、「侯(侯)」六篇、「甫(邠)」七篇、「魏」十篇からなる。伝世の『毛詩』と対照すると、排列に若干の相違があり、また「侯風」という『毛詩』には見られない六篇は、『毛詩』の「魏風」に相当し、また安大簡の「魏風」は、冒頭的一篇を除く他の九篇が『毛詩』の「唐風」に該当する。

詩は竹簡に連続して筆写されており、各篇末には概ね区切り符号(墨釘)が認められるものの、いずれの冒頭にも篇題は記されていない。但し、各「風」の終わりはカギ状の符号(墨鉤)で区切られていたようである。「周南」末尾の第二十簡は、詩文の末尾に墨釘を打ち、若干の余白に続いて「周南十又一」と篇数を明示した後、符号で区切り、以下留白となっている

(注7)。

安大簡『詩經』第二十簡

「召南」と「秦」は末尾簡残欠のため、この点を確認することができない。「侯(侯)」末尾の第八十三簡は「侯六」と篇数を記した後、符号で区切り、以下三字分を空白としているが、その後、詩とは直接関わりのない十三字が記されている。整理者はこれを、余白を活用した「習書」ではないかと推定する。

「甬(鄘)」末尾の第九十九簡は詩文の末尾に墨釘を打ち、若干の余白の後、「甬九白(柏)舟」と記す。これは、「甬」が九篇から成っていることと、その首篇が「柏舟」であることを示しているであろう。安大簡『詩經』には、各篇冒頭に篇題は記されていないが、それは、篇題がなかったからではなからう。整理者は、この「柏舟」の記載を基に、当時すでに詩三百篇の篇名は確定していたと推定する。

安大簡『詩經』第九十九簡



「魏」末尾の第十七簡は、「魏九」の後が留白で、竹簡下部に「葛屨(屨)」と記されている。これは、魏風が九篇から成り、冒頭篇が「葛屨」であることを示しているであろう。これも篇名がすでにあった証拠となる。なお、安大簡『詩經』には、『毛詩』に見られるような詩序に相当するものはない。

注目されるのは、安大簡『詩經』と『毛詩』とを比較した場合、多くの異文があり、また詩の章の順番(章次)も一部異なっているという点である。徐在国「安徽大学蔵戦国竹簡《詩經》詩序与異文」(『文物』二〇一七年第九期)は、すでにその点を指摘している。また、黄徳寛「略論新出戦国楚簡《詩經》異文及其價值」(第二十八回中国文字学国際学術研討会提出論文、二〇一七年五月)は、具体的に、章次が異なる七篇の名を挙げている。

出土竹簡に仮借字などの異文が多いという点については、郭店楚簡、上博楚簡以来充分経験しているので、それほど驚きではなかった。古代においては、字形や音の類似性によって、我々が想像する以上に漢字が緩やかに通用していたのである。ただ、『詩經』の篇の排列や章次に多くの異文があるという点は、古代におけるテキストの流通や経書の成立という点で大いに注目される。

そこで、安大簡『詩經』を通過し、各篇の章次を確認してみると、黄徳寛氏の指摘する篇以外にも、『毛詩』と異なるものを多々見いだすことができる。以下では、こうした現象を、「異文」に倣って「異章次」と仮称して検討を進めたい。

まず、安大簡『詩經』全体では、異章次ほどの程度見られるのであろうか。全五十七篇を通過し、その全容を確認したい。

まず、「周南」は十篇(「汝墳」(全欠)を含めると十一篇)中、二篇に章の転倒が見られる。具体的には以下の通りである。

卷耳 第二章が『毛詩』第三章、第三章が『毛詩』第二章
螽斯 第二章が『毛詩』第三章、第三章が『毛詩』第二章

次に、「召南」は十四篇中、三篇に異章次が確認される。

羔羊 第二章が『毛詩』第三章、第三章が『毛詩』第二章
殷其雷 第一章が『毛詩』第三章、第三章が『毛詩』第一章
江有汜 第二章が『毛詩』第三章、第三章が『毛詩』第二章

次に、「秦」は十篇中、四篇に異章次が見られる。

車鄰 第二章が『毛詩』第三章、第三章が『毛詩』第二章
駟驥 第二章が『毛詩』第三章、第三章が『毛詩』第二章
小戎 第二章が『毛詩』第三章、第三章が『毛詩』第二章
黄鳥 第一章が『毛詩』第二章、第二章が『毛詩』第三章、第三章が『毛詩』第一章

次に、「侯(侯)」は六篇中、一篇に異章次が見られる。

碩鼠 第一章が『毛詩』第二章、第二章が『毛詩』第一章

次に、「甫(鄘)」は七篇中、二篇に異章次が見られる。

牆有茨 第一章が『毛詩』第三章、第三章が『毛詩』第一章

定之方中 (残欠のため未詳) 第二章が『毛詩』第三章、第三章が『毛詩』第二章

最後に、「魏」は十篇中、三篇に異章次が見られる。

蟋蟀 第一章が『毛詩』第二章、第二章が『毛詩』第一章

綱繆 第二章が『毛詩』第三章、第三章が『毛詩』第二章

鵲羽 第二章が『毛詩』第三章、第三章が『毛詩』第二章

以上、総計で五十七篇中、十五篇に異章次が確認され、その割合は約二十六パーセントとなる。実に四篇に一篇という高い比率であり、これは竹簡本の筆写者の単なる誤写とは考えにくい割合である。

もともと竹簡の筆写者や、筆写の状況と誤写の関係については充分留意する必要がある。これまで公開されている戦国時代の竹簡においても、極めて端正に筆写されているものがある一方で、見るからに忽卒に書かれたものも確認される。おそらく前者は筆写を専門とする師匠格の人物が書いたもの、後者は学習中の門人によるものではないかと考えられる。もし竹簡を製作し、筆写する機関・工房のようところがあれば、そこには複数の筆写者がいたと推測される。まだ熟練していない筆写者が担当すれば、誤写が発生する可能性も増えるのではなからうか。

しかし、安大簡『詩経』は文字も整然としており、文字間隔もゆったりしている。少なくとも忽卒に書かれたものでない。それにもかかわらず、こうした多くの「異章次」が確認されるのである。では、こうした現象はなぜ生じたのであろうか。

四 「異章次」発生要因

その最大の要因は、『詩経』の文献的性格に求められるであろう。すなわち、各詩は、もともと口承されていた古代歌謡の特性として、原則一句

四言から成る類似章の反復、すなわち「疊詠形式」で構成されている(注8)。後世の唐詩のような「起承転結」といった構成ではなく、類似した内容が繰り返して繰り返されるという点に最大の特色がある。この点は、同じく経書とは言っても、『論語』や『易経』などとは大いに異なる特性である。

例えば、召南・殷其雷は、第一章が『毛詩』第三章、第三章が『毛詩』第一章に相当するという事例であるが、こうした異章次が起ころるのは、次のように、類似句が反復しているからであろう。

(安大簡『詩経』召南・殷其雷)(注9)

殷其雷矣、在南山之下、何斯遑斯、莫或遑處、振振君子、歸哉歸哉。

殷其雷矣、在南山之側、何斯遑斯、莫敢遑思、振振君子、歸哉歸哉。

殷其雷矣、在南山之陽、何斯遑斯、莫敢或皇、振振君子、歸哉歸哉。

(現行本『毛詩』召南・殷其雷)

殷其雷、在南山之陽、何斯遑斯、莫敢或遑、振振君子、歸哉歸哉。

殷其雷、在南山之側、何斯遑斯、莫敢遑息、振振君子、歸哉歸哉。

殷其雷、在南山之下、何斯遑斯、莫或遑處、振振君子、歸哉歸哉。

全三章各六句の詩であるが、極めて類似した句が反復している。各章の第一句・第三句・第五句・第六句は全く同一である。また、各章の第二句の「在南山之下」「在南山之側」「在南山之陽」は、各句末の「下」「側」「陽」の違いのみである。その順序にどれほどの必然性があるのだろうか。こうした詩では容易に異章次が発生すると言えよう。

もともと、『詩経』の中でも、王朝の誕生や歴史を説く「雅」の諸篇では、章は時系列に配置されなければならず、転倒は起こりにくいのではないか

と考えられる。残念ながら安大簡『詩経』には「雅」に相当する篇は含まれていないが、一例として『毛詩』の大雅・生民之什「生民」冒頭部を確認してみよう。

厥初生民、時維姜嫄。生民如何、克禋克祀、以弗無子。履帝武敏歆、攸介攸止、載震載夙、載生載育、時維后稷。

誕彌厥月、先生如達、不圻不副、無苗無害。以赫厥靈、上帝不寧、不康禋祀、居然生子。

この詩は、周王朝の始祖「后稷(棄)」の誕生と成長を謡うので、仮に章次が転倒すれば時系列が破壊され、大きな矛盾を来す。

また、小雅・谷風之什「信南山」は古代聖王「禹」にさかのぼる宗廟祭祀を謡ったもので、これも章次が転倒すれば、祭りの順序が混乱することとなる(注10)。

しかし、安大簡『詩経』で確認された国風諸篇は、より素朴な古代歌謡を記すもので、類似章を繰り返して唱和するという詩の特性から、異章次は比較的容易に起こりえたと推測される。

特に、各章の句の内容が同一または類似している場合、あるいは章の冒頭語句が同一または類似している場合は異章次になりやすいと考えられる。全三章の詩で言えば、後続章の第二章と第三章の転倒が多くなると思われる。安大簡『詩経』では、第二章と第三章が転倒しているものとして、卷耳、蟋蟀、江有汜、車鄰、駟驥、小戎、定之方中、綢繆、鴛羽の九例を挙げる事ができる。

これに対して第一章は冒頭語が篇題に取られることもあり、また、第二章以降に比べてより強く記憶に残るため、相対的に転倒は起こりにくい

考えられる。但し、全章の冒頭句が同一の場合、安大簡『詩経』でも、第一章が転倒することもある。これは、右に例示した殷其雷をはじめ、黄鳥、碩鼠、牆有茨、蟋蟀の五例がそれに該当する。

以下に、異章次の生じている章の冒頭語句がどのように類似しているか、具体的に確認してみよう。

(周南)

卷耳 第一章冒頭は「采采」、他章の冒頭はいずれも「涉彼……」

螽斯 全三章とも冒頭は「衆斯之羽」

(召南)

羔羊 第一章冒頭は欠失、第二章、第三章冒頭はともに「羔羊」

殷其雷 全三章とも冒頭は「殷其雷矣」

江有汜 全三章とも冒頭は「江有……」

(秦)

車鄰 第二章冒頭は「阪有桑」、第三章冒頭は「坂有漆」

小戎 第二章冒頭は「駸駸孔群」、第三章冒頭は「駟牡孔阜」

黄鳥 全三章とも冒頭は「駸駸黄鳥」

(侯)

碩鼠 全三章とも冒頭は「石鼠石鼠、毋食我……」

(邶)

牆有茨 全三章とも冒頭は「牆有蜾蠃、不可……」

(魏)

蟋蟀 全三章とも冒頭は「蟋蟀才堂」

綢繆 全三章とも類似句。冒頭は「綢繆束新」「綢繆束楚」「□繆

束芻」

鴝羽 全三章とも類似句。冒頭は「肅肅□□」「肅肅鴝行」「肅肅

鴝翼」

このように、冒頭語句が同一または類似している場合、異章次になりやすいという傾向を確認することができる。

但し、句単位で章を跨ぐような形での移動現象は見られない。例えば、第一章の中間の一句が第二章の中に単独で紛れ込むといった移動は確認されない。これは、章の中の各句末が基本的に押韻していることから、その原則を無視した句単位での移動や転倒は起こりにくいためであろう。異章次はあくまで、語句が同一または類似する章の単位で生ずるのである。

五 「駟驥」章次の特異性

ところが、秦風「駟驥」は、章単位の異同とは言っても、他の例とはやや様相が異なる。安大簡『詩経』駟驥は現行本『毛詩』と比較した場合、第二章と第三章が逆転しているのであるが、第二章冒頭は「遊于北園」、第三章冒頭は「奉之寺晨」であって、前掲の各篇のように同一または類似の句ではないのである。念のため、安大簡『詩経』駟驥全三章を『安徽大学蔵戦国竹簡(一)』の釈読に従って記し、現行本『毛詩』と対照してみよう。

(安大簡『詩経』駟驥)

四駟孔夷、六轡在手、公之媚子、從公于狩。

遊于北園、四駟既束、象車鸞鑣、載獫狁獯。

奉之寺晨、晨牡孔碩、公曰左之、舍拔則獲。

(現行本『毛詩』駟驥)

駟驥孔阜、六轡在手、公之媚子、從公于狩。

奉時辰牡、辰牡孔碩、公曰左之、舍拔則獲。

遊于北園、四馬既閑、輶車鸞鑣、載獫狁獯。

このように、「駟驥」全三章は、類似句で構成されてはならず、冒頭語も、三章とも異なっているのである。ではなぜ異章次となっているのであろうか。強いて言えば、第一章冒頭の「駟驥」(竹簡では「四駟」と第二章(『毛詩』の第三章)の「四馬」(竹簡では「四駟」との類似により、もともと第三章にあった句が第一章に牽引されて第二章に転倒したという可能性も考えられる。

ただ、それ以外にも推測される要因として、詩の内容に注目したい。この詩について、従来、『毛詩』第三章「遊于北園……」は、第二章末尾の「則獲」を受け、狩猟後のこと、つまり狩猟を終えた公子たちが北園で馬を駆って遊ぶさまを謡ったものとされてきた。その二句目の「閑」字も、毛伝は「習也」とする。時間をかけて調練されている、飼いや慣らされているとの意であろう。「毛序」は、詩意について「駟驥は、襄公を美するなり。始めて命ぜられて田狩の事、園囿の楽しみ有り(駟驥、美襄公也。始命有田狩之事、園囿之樂焉)」と解説する。「田狩之事」から「園囿之樂」へとこの順序が意識されている。

しかし、『詩経』を経書解釈の枠から解放とうとする近年の研究では、民俗学・宗教学・金石学などの観点も取り入れて、伝統的な『毛詩』の理解とは異なる解釈も提起されている(注11)。この詩に関して言えば、『詩経』における「遊」字の検討から、この「遊」は単に人が「あそびたわむれる」「楽しむ」の意ではなく、「神霊の遊行」とする解釈も指摘されているのである。狩猟を終えた後の馬がのびのびしているのではなく、神の使者である馬ののびやかな様子を表しているという理解である(注12)。「閑」字も、竹簡は「束」に作り、整理者は出土文字資料の通用例から、「間」「閑」に通ずるとする。必ずしも毛伝のように解釈する必要はなく、(神馬の)「のびやかな」「のびやかな」という意味でも理解できよう。

もともとの詩意がそのようなものであったとすれば、第二章と第三章の章次については、別の見方も可能となろう。つまり、神霊の加護を受けて(竹簡第二章)、狩猟に成功する(竹簡第三章)という流れとして謡われていたとの推測もできるのである。従って、この篇の異章次は、竹簡側の単なる誤写の結果生じた可能性も残るものの、むしろ竹簡側が本来の詩の形を残しているとも考えられるのである。

こうした竹簡本と『毛詩』との関係は、篇題についてもうかがうことができる。『毛詩』の「駟驥」の語については、他の箇所での用例がないことから、古来、特殊用語として注目されてきた。毛伝は「驥、驪(黒毛の馬)」と説くが、胡承珙『毛詩後箋』は、『説文解字』に、「驪、馬深黄也」「驥、馬赤黒色」とあるのを毛伝が混交したものと指摘する。王先謙『詩三家義集疏』は、毛伝が「驥」を「驪」と説く一方で、齊詩が「駘」に作ることを指摘し、「駘」は「駘」の誤字とする。また「駟驥孔阜」とは結局「四牡孔阜」の意であり、国風の「碩人」「小戎」「四牡」「采芾」など他の多くの篇に「四牡」の用例があることを指摘する。

これに対して安大簡『詩経』は、冒頭の二字を「四駮」に作る（第四十三簡）。これについて整理者は、「駮」は「戊」声で「牡」の異体字、上古音でも「戊」「牡」はともに明紐幽部に属すると解説する。第二章二句目の「四牡（牡）」とも対応していたと考えられよう。そして整理者は、『毛詩』の篇名「駮駮」は「四駮」の「誤書」であると考ええる。この推測が正しければ、竹簡の方がむしろ本来の姿を留めるものであり、『毛詩』は字形に引きずられて誤った篇題を付け、後世の注釈者もそれに基づき苦しい解説をしてきたということになる。



安大簡『詩経』第四十三簡
「四駮」

同様に、竹簡本第三章冒頭の「奉之寺晨、晨牡孔碩」（第四十四簡）は『毛詩』と字句が大きく異なる点であるが、これも、単に竹簡本側の誤写であるかどうかについては慎重な検討が必要である。『毛詩』は「奉時辰牡、辰牡孔碩」に作り、従来、「時の辰牡を奉ぜん、辰牡^{はなは}孔^{おほ}だ碩いなり」（季節の獣を狩りましょう。その獣はとても大きい）と理解されてきている。これに対して竹簡本の整理者は、竹簡の原文が「奉寺^三唇^三牡」^三と表記されていることに注目し、上の「三」を合文号、下の「三」を重文号と捉えて、「奉之寺晨、晨牡孔碩」と釈読する一方、『毛詩』は「三」の位置の異なるテキストに基づき、ここを「奉寺唇^三牡^三孔碩」と理解したため、現行本のような字句になつたのではないかと推測している。すなわち、ここも、本来は竹簡本の方が正しく、『毛詩』は記号位置を誤ったテキストに基づいて字句を確定してしまったという見方もできるのである。



安大簡『詩経』第四十四簡
「奉寺唇^三牡^三」

しかし、従来は『毛詩』の原文そのものに誤りがあるという可能性などはほとんど考慮されてこなかった。そこで例えば、馬瑞辰『毛詩伝箋通釈』はこの『毛詩』の語句に基づいて考証を重ね、「辰牡」の内、「辰」は「震」（めすじか）で、直後の「牡」と対になっていると説く。「めす」「おす」を対応させようとした一見合理的な解釈である。しかし、もともと竹簡本の記号位置が正しかったとすれば、こうした考証は意味をなさず、要するにここは、季節の大きな獣を捧げるという意味だった可能性がある。

なお、『毛詩』との相違という点で、この「駮駮」篇以外で特に注目されるのは、同じく秦風の「小戎」である。これも安大簡と『毛詩』を対照してみよう。

（安大簡『詩経』小戎）

小戎輶收、五檠良輶。游環脅驅、紛鞞塗續。文輶象轂、駕其騏驥。
我念君子、温其如玉。在彼板屋、撓我心曲。
倭駟孔群、鉤矛塗鏞。虻旃有苑、竹秘緄縻。虎輶豹膺、交輶二弓。
我念君子、載寢載興。厭厭良人、遲遲德音。
四牡孔夷、六轡在手。騏驎是中、駟驪是驂。虻盾是合、塗以艘輶。
我念君子、温其在邑。方何爲期、胡然余念之。

（現行本『毛詩』小戎）

小戎倭收、五檠梁輶。游環脅驅、陰鞞塗續。文茵暢轂、駕我騏驎。
言念君子、温其如玉。在其板屋、亂我心曲。

四牡孔阜、六轡在手。騏驎是中、騶驪是駟。龍盾之合、鎡以釧軌。
言念君子、溫其在邑。方何爲期、胡然我念之。

儻駟孔羣、公矛鏐鏐。蒙伐有苑、虎軔鏐鏐。交軔二弓、竹閉緹滕。
言念君子、載寢載興。厭厭良人、秩秩德音。

このように、全三章の内、第二章と第三章が異章次の関係にある。第一章冒頭の「小戎」は篇題に取られることもあつて移動することはなかったと思われるが、安大簡の第二章冒頭は「駟牡孔羣」(『毛詩』第三章は「儻駟孔羣」、第三章冒頭は「駟牡孔阜」(『毛詩』第二章は「四牡孔阜」とやや類似している)、これにつられて第二章と第三章が転倒した可能性もある。また各章に「我念君子」(『毛詩』では「言念君子」という共通の句がある)もそれを助長したかもしれない。

ただ、第三章末尾のみ、四字句ではなく、「胡然我念之」(胡然れぞ我をして之を念わしめん)と五字句となつてゐる点は注目に値する。最終章の句末のみ字数が増加する例としては、『毛詩』では他に邶風・簡兮、邶風・載馳、齊風・鷄鳴、豳風・東山、豳風・九罭などがある。詩の最後を大きく伸ばして歌い終わるといふのは自然な作法ではなかったかと推測される。残念ながら安大簡『詩経』にはこれらの篇は含まれていないので対照することはできない。

もつとも、逆に、第一章・第二章の字数が多い例もあり、邶風・君子偕老、王風・中谷有蓷、王風・丘中有麻、鄭風・清人、鄭風・子衿、陳風・宛丘などはそれに該当する。この内、安大簡で確認できるのは、邶風・君子偕老なので、これを対照してみよう。

(安大簡『詩経』君子偕老)

君子偕壽、副笄六珈。逶迤逶迤、如山如河、象服是宜。「之子不淑、云」如之何。

玼其翟也、參髮如雲、不脣鬢也。玉璫象揅也、揚且皙也。胡然天也。「瑳其展也、蒙」彼縹緜、是褻樂也。子之清揚、揚且顔也。展如人也、邦之媛兮。

(現行本『毛詩』君子偕老)

君子偕老、副笄六珈。委委佗佗、如山如河、象服是宜。子之不淑、云如之何。

玼兮玼兮、其之翟也。鬢髮如雲、不脣鬢也。玉之璫也、象之揅也、揚且之皙也。胡然而天也、胡然而帝也。

瑳兮瑳兮、其之展也。蒙彼縹緜、是繼袿也。子之清揚、揚且之顔也。展如之人兮、邦之媛也。

このように、『毛詩』では、全三章の句数は揃っておらず、第二章が突出して字数が多いが、安大簡ではむしろ第二章が少なく、全体も四字句で調っているような印象を受ける。

いづれにしても、この句形・字数の特異性だけから即断はできないが、一つの可能性として、これも竹簡の側が本来の形を残しているとも考えられる。

それに関連して、末尾の第三章のみ句数が大きく相違するものとして、魏風・揚之水(『毛詩』では唐風に所屬)がある。『毛詩』は第一章・第二章を各六句で構成するが、第三章のみ四句と短くなる。これに対して安大簡『詩経』は、『毛詩』にはない「如以告人、害于躬身」の二句を記す。

〔安大簡『詩經』揚之水〕

揚之水、白石鑿鑿、素衣朱襮、從子于沃、既見君子、云何不樂。

揚之水、白石皓皓、素衣朱纁、從子于鵠、既見君子、云何其憂。

揚之水、白石粼粼、我聞有命、不可以告人、如以告人、害于躬身。

〔毛詩』揚之水〕

揚之水、白石鑿鑿、素衣朱襮、從子于沃、既見君子、云何不樂。

揚之水、白石皓皓、素衣朱裾、從子于溇、既見君子、云何其憂。

揚之水、白石粼粼、我聞有命、不敢以告人。

整理者が指摘する通り、竹簡本の最後の二句は『毛詩』にはないものの、『荀子』臣道篇引く『詩』に「不可以告人、妨其躬身」と類似句が見える。

『荀子』楊倞注は、この二句を「逸詩」であるとする。しかし、逸詩ではなく、もともと「揚之水」篇にあった句を『荀子』が引用していたのかもしれない。安大簡『詩經』に記されている通り、本来は全三章各六句から成っていたと考えるのが自然ではなからうか。『毛詩』あるいはその基となったテキストは、最後の二句を何らかの事情で欠落させてしまったとも考えられる。

その一因として推測されるのは『毛詩』衛風・考槃の表現である。

考槃在澗、碩人之寬、獨寐寤言、永矢弗諼。

考槃在阿、碩人之邁、獨寐寤歌、永矢弗過。

考槃在陸、碩人之軸、獨寐寤宿、永矢弗告。

このように、全三章各四句からなる詩であるが、その各章末尾が「永矢

弗諼」（永く矢え諼ることなかれ）、「永矢弗過」（永く矢え過つことなかれ）、「永矢弗告」（永く矢え告ぐることなかれ）と否定形の句で揃っている。これが章末の定型句だと強く意識されていたのであれば、それに影響されて、第三章四句目の「不敢以告人」（敢て以て人に告げず）という否定形の句を詩の末尾と誤認し、その直後にもともとあった二句を書き漏らしたテキストがあり、『毛詩』はそれに基づいて本文を確定してしまったという可能性もあろう。

六 安大簡『詩經』の資料的意義

新発見の安大簡『詩經』は、『詩經』の成立と伝来について大きな手がかりを与えてくれる。これまでも、『詩經』の個々の字句の相違については注目されてきた。王先謙『詩三家義集疏』は、いわゆる三家詩の異文を考証する代表的な成果であり、馬瑞辰『毛詩伝箋通釈』は毛伝鄭箋を底本としながらも、その冒頭、「詩人義同字変例」と「毛詩古文多假借考」の項を設け、異文・假借字について概説している。また、近年では、袁梅『詩經異文彙考辨証』（齊魯書社、二〇一三年）が朱熹『詩集伝』を底本とし、孔穎達『毛詩正義』も参考にして異文を取り上げ解説を加えている。

さらに、胡平生・韓自強『阜陽漢簡詩經研究』（上海古籍出版社、一九八八年）は、一九七七年に発見された阜陽漢簡『詩經』の実態を明らかにし、于蒹『金石簡帛詩經研究』（北京大学出版社、二〇〇四年）は、上博楚簡・阜陽漢簡や他の金石簡帛資料に見える『詩經』の異文について考証を加えた。ただ、これらは断片的な字句を対象としているため、個々の異文にのみ注目が集まり、詩の構成全体については考察が及んでいない。それは、資料的な制約があつてやむを得ないことだったとも言える。

これに対して本稿では、詩を構成する章次について考察し、『毛詩』と安大簡『詩経』との間に、大きな違いがあることを確認した。また、その相違が生ずる主な原因として、類似句が連続していること、すなわち疊詠形式で構成されるという『詩経』の文献的性格を指摘した。こうした確認が可能となったのも、安大簡『詩経』が竹簡九十七枚というまとまった分量で発見されたからに他ならない。

では、安大簡『詩経』と『毛詩』との資料的価値、優劣はどのように判定すべきであろうか。儒教経典『毛詩』に馴染んだ我々としては、どうしても『毛詩』の側を評価したいところではある。異章次となったのは、安大簡『詩経』側の誤写の可能性もある。竹簡に転写を重ねて伝えられていくテキストでは、当然その間に誤写も生じたであろう。

しかし、『毛詩』の権威を前提として、異文や異章次がすべて竹簡側の誤写によると断定するのは早計であろう。異章次が四篇に一篇という高い比率になることから、その相違のすべてが竹簡側の単なる誤写によるとは考えにくい。中には、むしろ竹簡側が本来の形を残し、『毛詩』の側が誤認・誤写してしまったのではないかと思われる箇所もあった。つまり、本来の章次を転倒させたのは、『毛詩』の側だったのではないかということである。

ただ、このことをもって、直ちに『毛詩』と安大簡『詩経』との優劣を評価することはできないだろう。戦国時代には、まだ異文・異章次を伴う複数のテキストが流通していたと考える方が自然である。そもそも口承で謡われていた詩を採録して文字化する際に、すでに異文や異章次が生ずることは、一つの宿命だったと言える。諸子百家の文献のように、先生の言葉や弟子門人たちが編集したり、著者自らが論理的な文章を書き下ろしたりしたものではなく、『詩経』は当初から大きな揺らぎを伴いつつ流通していたと推測される。

従って、詩意（詩の主題）についても一定の幅を持って理解されていたと考えるのが妥当であろう。この点について大きな手がかりを与えてくれるのは、戦国時代中期頃の写本と推定されている上博楚簡『孔子詩論』である。『孔子詩論』には、『詩経』に該当する本文は記されていないが、詩意を端的に解説する部分があり、しかもそれが「毛序」の解説と異なる点があるのは大いに注目される。

例えば、周南・兔置について、「毛序」は「后妃の化なり。関雎の化行わるれば、則ち徳を好まざるもの莫く、賢人衆多なり」（注13）と説くが、上博楚簡『孔子詩論』第二十三簡では、「兔置其用（用）人、則吾取」と記す。すなわち、毛伝が周南冒頭の関雎と対応させて、后妃の徳化を説いたものとするのに対して、『孔子詩論』は人を用いることと説くのである。この点について、于蒞『金石簡帛詩経研究』は、『孔子詩論』の詩意解説が『墨子』尚賢上篇の「文王舉閔天顛於置罔之中、授之政、西土服」の「用人旧事」に合致し、それがこの詩の本義であると説く。本義であるかどうかは断定できないが、少なくとも、戦国時代において、『毛詩』とは異なる詩意理解があったことは明らかである。

また、周南・卷耳について、「毛序」は、「后妃の志なり。又当に君子を輔佐し、賢をせ求め官を審かにし、臣下の勤勞を知るべし」（注14）と説くが、『孔子詩論』第二十九簡では、「倦（卷）而（耳）不智（知）人」と記す。すなわち、毛伝は后妃が賢人を思つて作つた詩とするのに対して、『孔子詩論』は「不知人」と説くのである。この点について于蒞『金石簡帛詩経研究』は、檜風・隰有萋楚の「樂子之無知」に鄭箋が「知、匹也」と解し、「樂わくば子に^{つれあい}知^れ無きを」と読まれているのを根拠に、「不匹於人」（再婚しない）の意とした上で、詩意は、むしろ朱子『詩集伝』が言うような「貞靜專一之至」に近いものになると指摘する。

このように、戦国時代の竹簡の発見によって、詩意についても『毛詩』とは異なる理解が当時存在していたことが明らかになりつつある。

もともと、伝統的な『毛詩』の立場については、ようやく宋代頃から批判的な見方も登場し始め、右の朱子『詩集伝』はその代表である。朱子は、孔子が三千篇の詩を三百篇に編纂したという『史記』孔子世家に基づく「孔子刪詩説」には懐疑的であり、また、自身の『詩経』評価に基づいて、特に「鄭風」「衛風」に「淫詩」が多いとして否定的な見方を表明した。

さらに日本の江戸時代でも、こうした批判的立場は散見され、大坂懷徳堂の中井竹山『詩断』は朱子『詩集伝』に依りつつも、朱子にも牽強附会の解釈があると指摘する。懷徳堂は基本的に朱子学を尊重する学校であったが、その教授たちは朱子の理解についても是々非々の態度で臨んでいた(注15)。

ただ、朱子にしても、それ以降の学者たちにしても、また江戸時代の漢学者についても、『詩経』が「経書」であるという枠組自体については暗黙の内に共有している。そのため、「批判的」な見方にも自ずから限界があったと言えよう。

中国では清朝が崩壊して科挙が終了し、立身出世に「経書」の伝統的理解は必須ではなくなり、新たな研究が誕生する土壌がようやく提供された。日本でも、明治維新以降から現代にかけて、金石学、民族学などの近代的学問の成果を受け、伝統的な枠組に拘泥しない新たな研究が登場することになった。

例えば、陳致『従儀礼化到世俗化―『詩経』的形成―』(上海古籍出版社「早期中国研究叢書」、吳仰湘・黄梓勇・許景昭訳、二〇〇九年)は、古文字学、音楽考古学などの観点から『詩経』について独自の考察を進め、その成立、分類、名称、個々の詩の解釈などについて毛伝・鄭箋に囚われな

い新見解を提出している(注16)。

詩の解釈については、例えば素直に読めば恋愛詩に他ならないものを、毛伝・鄭箋・孔穎達疏が政治的な文脈で捉えていることを批判している。

また「風」「雅」「頌」の分類についても、従来は、「風」は「諷」で、戒戒のための政治手段、「雅」は「正」で王政の施行と関わり、「頌」は君王の美德を褒める賛美の詩であると考えられていた。しかし、「風」「雅」「頌」の個々の詩を冷静に読めば、そのような意味づけによる分類にはならないと指摘している。そして、『詩経』の形成は決して単純なものではなく、はじめは宗教活動に関わっていた詩が、詩・楽・舞の三位一体となった儀礼的活動の中で、統治階層の上層で次第に「標準化」「儀礼化」し、さらに時間の経過と社会の発展によって変形、分散し、「地方化」「世俗化」していったと考える。これが殷周両文化の接触によって展開された『詩経』の形成だと説くのである(注17)。

これは、著者の陳致氏が、広く欧米や日本の研究にも注目し、現代的な超領域の研究として『詩経』に挑んだ重要な成果であるが、その契機の一つとして、郭店楚簡、上博楚簡の発見があったことも見逃せない事実である。

また、藪敏裕『『毛詩』の文献学的研究』(汲古書院、二〇二〇年)は、副題に「出土文献との比較を中心に」とある通り、近年出土の郭店楚簡、上博楚簡などを活用して、『詩経』の形成過程を考察した大作である。『毛詩』『毛伝』『毛序』が先秦からあったという従来の通説を否定し、戦国期から漢代に至る三層の詩理解を想定するもので、その見解は大いに評価されよう。

ただ、詩理解の三つの層というのは、あくまで作業仮説であると考えられるが、『詩経』の成立過程そのものに明確な三層があったと受け取ってし

まうのはやや危険であろう。「地層」を例にして考えると、「層」の内部は原則均一・同質であり、層と層との間には明確な境界と断裂があるはずである。しかし、『詩経』のテキストや理解についてこうした層が想定されるのかどうかは慎重に考える必要がある。単に便宜的な時代の層というだけなら、その層を貫いて継承されるテキストや解釈もあったであろう。また本書では「原義」との表現が多用されるが、何をもって詩の原義とするのかも難しい問題で、出土文献から読み取れるものが必ずしも原義とは限らないであろう。なお本書は、刊行が安大簡『詩経』の公開後であるにも関わらず、安大簡についての言及がないのは、やや残念である。これについては今後さらに検討が進むものと期待される。

ともあれ、『詩経』の大きな見直しが進みつつあった中、近年の出土文献の発見がその状況に拍車を掛け、こうした画期的な研究が登場しているのである。毛伝・鄭箋以来、儒教経典として読まれてきた『詩経』が、それは異なる姿を現そうとしていると言えよう。

本稿でも明らかにした通り、安大簡『詩経』には、詩序に相当する文章はなく、また、これまで『毛詩』に見えないことから「逸詩」と考えられてきた詩の章句が安大簡に存在するなどの現象を確認できた。また何より、詩の構成（章次）そのものが『毛詩』とは大いに異なるものもあり、それに連動して、これまでの詩意理解や字句の解釈が正しかったのかについて再考を迫られる箇所もあった。

この他、国風の部分けや排列、各篇の所属などについても、安大簡『詩経』と『毛詩』との異同が明らかになった。この点については、『安徽大学蔵戦国竹簡（一）』前言の「一、簡本国風次序」「二、簡本国風の篇名・篇次和篇数」が詳しく紹介している。

いずれにしても、安大簡『詩経』は、『毛詩』テキストが固定される以前

に、複雑な形成過程があったことを示唆している。戦国期は、『詩経』テキストの「揺籃期」または「並行流通期」と言えるのではなからうか。

しかしながら、このことは、戦国期において收拾がつかぬほどに『詩経』テキストが混乱していたということの意味しない。異文や異章次が認められるとは言っても、それは一定の範囲内における現象であり、まったく様相を異にする詩が無関係に併存していたという訳ではない。疊詠形式・句末押韻で構成される詩は異章次を産む一因ともなったが、一方では、テキストが果てしなく乱れていくのを強く抑制していたとも言えるのである。安大簡『詩経』は、戦国期におけるそうしたテキストの様相を伝える貴重な資料である。

結 語

以上、本稿では、二〇一九年に公開された安徽大学蔵戦国竹簡『詩経』について新出土文献研究の立場から基礎的な検討を行った。

戦国時代の『詩経』テキストに、異文のみならず異章次が数多く存在することは、改めて『詩経』の文献的特性が何であるかを物語っていると言えよう。また、『毛詩』が経書として確定する以前には、複雑なテキスト形成の過程があったことも想定された。新出土文献の発見は、これまで充分に解明されていなかった先秦時代のテキスト形成について大きな手がかりを与えてくれるのである。

注

- (1) こうした状況を受けて、筆者は、上博楚簡、清华簡、岳麓秦簡、銀雀山漢墓竹簡、北京大学漢簡などに関する自身の研究をまとめ、『竹簡学—中国古代思想の探究—』(大阪大学出版会、二〇一四年)として刊行した。この書は、中国から翻訳出版の依頼を受け、二〇一七年、上海の東方出版中心から同名の中国語版として刊行された。また、出土文献研究を牽引する武漢大学の陳偉氏の著書『楚簡冊概論』(湖北教育出版社、二〇一二年)を日本の読者のために翻訳し、『竹簡学入門—楚簡冊を中心として—』(湯浅邦弘監訳、草野友子・曹方向訳、東方書店、二〇一六年)として刊行した。
- (2) 大西克也「非発掘簡を扱うために」(谷中信一編『中国出土資料の多角的研究』汲古書院、二〇一八年)。なお大西氏の論考は、同書第一部「辨偽学の成立」所収。同書第二部は「非発掘簡の資料的価値の確立」として十一本の論考を収録している。
- (3) 銀雀山漢墓竹簡は、出土地は明らかになっているものの、当時はまだ竹簡に対する認識が乏しく、農民が手荒く掘り出したため、多くの竹簡が破損してしまったというケースである。
- (4) 筆者はこの「概述」の重要性に鑑み、二〇一七年度の大阪大学の演習でこれを取り上げ、関係者の協力を得て日本語訳した後、黄徳寛氏の了解を得て『中国研究集刊』第六十四号(二〇一八年六月)に掲載した。
- (5) Yuasa Kunihiro On Stanzaic Inversion in the Qin feng 秦風 Ode³ Sittie, 駟職 (Iron-Black Horses) in the Anhui University Bamboo Manuscript of the Shi jing 詩經(Classic of Odes), bamboo and silk 4 (2021)。
- (6) 図版を確認すると、各竹簡の上中下三箇所編綫痕と契口が見られる。また、第一編綫の上には文字は記されておらず、第三編綫の下にやや小さな字で竹簡番号が付されていることが確認される。
- (7) 留白とは、竹簡に余白があるにもかかわらず文字を記さず空白となっている現象で、現在の改行・改頁にあたる処置である。
- (8) 吉田文子『詩経』の疊詠形式にみられる変換語の諸相について(『お茶の水女子大学中国文学会報』第三十一号、二〇一二年)によれば、『毛詩』三百五篇中、疊詠形式を含むものの総計は二百四篇になるという。
- (9) 以下、安大簡『詩経』の引用に際しては、『安徽大学蔵戦国竹簡(一)』の釈読に従って一部異体字を通行字体に改め、重文号・合文号を文字に置き換える。また、対照する『毛詩』の引用に際しては、『安徽大学蔵戦国竹簡(一)』の「韻読対読表」に掲載された「毛詩」による。
- (10) 冒頭部は、「信彼南山、維禹甸之。昫昫原隰、曾孫田之。我疆我理、南東其畝。上天同雲、雨雪雰雰。益之以霡霖、既優既渥、既霑既足、生我百穀」となる。
- (11) こうした『詩経』研究史については、石川忠久『詩経』解説(新釈漢文大系『詩経』上巻、明治書院、一九九七年)、張文朝『日本における『詩経』学史』(台湾・万卷楼、二〇一二年)参照。
- (12) 石川忠久『詩経』中巻(新釈漢文大系、明治書院、一九九八年)。
- (13) 后妃之化也。關雎之化行、則莫不好德、賢人衆多也。
- (14) 后妃之志也。又當輔佐君子、求賢審官、知臣下之勤勞。
- (15) 朱子『詩集伝』と中井竹山『詩断』については、田世民『詩に興り礼に立つ—中井竹山における『詩経』学と礼楽思想の研究—』(台湾大学出版中心、二〇一四年)、湯浅邦弘編著『懷徳堂事典増補改訂版』(大阪大学出版会、二〇一六年)参照。
- (16) この著は、原著者が英語版として二〇〇七年に刊行した、The Shaping of the Book of Songs : From Ritualization to Secularization (Netteral (独))に基づき、さらに加筆修正した上で中国語版として二〇〇九年に出版したもので

ある。

(17) この研究成果については、同書に序文を寄せた李学勤氏が、二〇〇八年に陳致氏の勤務先である香港浸會大学を訪問した際に、この原著となる英語版を寄贈され、特に超領域的な研究方法とそれに基づく新見解を評価する旨を表明している。また、同書については、すでに書評として、朱淵清「文明進程与文化特質—陳致《從儀礼化到世俗化—〈詩經〉的形成—》讀後」(『古典文献研究』第十三輯、二〇一〇年)、孫立堯「評陳致《從儀礼化到世俗化—〈詩經〉的形成—》」(『文学評論叢刊』第十三卷第一期、二〇一一年)があり、前者は、陳致氏の著書が王国維の研究の延長線上にあること、『詩』が異なる地域の異なるグループによって、異なる経緯と時間を経て編集されたことを明らかにしたこと、方法論として、音楽考古学と古文字学が結合した点に特色があること、などを高く評価している。また後者は、陳致氏の研究が『詩經』だけに限定したのではなく、殷周から春秋時代に至る礼楽文化全体を視野に収めている点、音楽考古学の成果を活かし、また甲骨文、金文などの出土文献資料と伝統的な古文字学・訓詁学の研究方法を総合的に運用している点などを高く評価している。

【附記】

本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究B「中国新出土文献の思想史的研究」(二〇一四〜二〇一八年)、および「戦国秦漢簡牘の総合的研究—安大簡・清華簡・上博簡・北大簡を中心として—」(二〇一九〜二〇二一年)(いずれも研究代表者湯浅邦弘)による研究成果の一部である。この論文は、中国の武漢大学の求めに応じて簡帛研究中心『簡帛』英語版(bamboo and silk)第四号(安大簡『詩經』特集)に、「On Stanzaic Inversion in the Qin feng 秦風 Ode's Strophe 駟驥 (Iron-Black Horses) in the Anhui University Bamboo Manuscript of the Shi Jing 詩經(Classic of Odes)」(二〇二一年一月)として英文で発表したものを基に、さらに大幅な増補改訂を加えて日

本語で発表するものである。英語版と内容の一部が重複する点については、武漢大学簡帛研究中心の了解を得ている。安大簡『詩經』の実見調査を快く了解して下さった黄徳寛教授、『簡帛』英語版に投稿の機会を与えていただいた陳偉教授に御礼を申し上げます。

湯浅 邦弘(ゆあさ・くにひろ)

一九五七年生まれ。大阪大学大学院文学研究科教授。専門は中国哲学。著書に『竹簡学—中国古代思想の探究—』(大阪大学出版会、二〇一四年)、編著に『清華簡研究』(汲古書院、二〇一七年)、主要論文に「時令説の展開—北京大学竹簡『陰陽家言』、銀雀山漢墓竹簡「陰陽時令・占候之類」を中心として—」(『漢字学研究』第六号、二〇一八年)など。